

春日横丁ラプソディ 日報⑩

宵雨と雨あがり

あ——、と、傘をとじながら、十河 薫は短い声をあげた。

柔らかな雨の音が午後七時過ぎの、灯りのともった商店街に響いている。

「おっ？ やあ、薫う！ こんばんはだよー！」

開いた硝子戸がらすどの向こうで、みなみが——万屋よろぎ みなみが、嬉しそうにぶんぶんと腕を振った。

「やあ」

返した声はなんだかおっかなびっくりになってしまったけれど、ともあれ薫は頭をさげて戸口を潜り、室内に入る。

銭湯・松の湯さんの入口横にある、ちいさなコインランドリー。

洗濯機が三つと、乾燥機が二つ。洗剤の自動販売器がひとつ。さほど明るくはない蛍光灯が照らす奥に細長い室内には、みなみのほかにお客はいない。

ぐおん、ぐろん、という音をたてて回る乾燥機の中で、タオルと衣服が右に左にはずんでいる。

「どしたん？ 薫は。洗濯機壊れたりした？」

「ううん。ずっと降ってるから、乾かしにだけ来た」

手に提げた大きめの袋を、薫は持ちあげてみせた。洗って脱水までは、さっき家でしてきたところだ。

「みなみは？」

「あ、うちもうちも。いちばん洗いの増やすんだから洗って乾かしてこいって言われてさあ」

背後の乾燥機を親指でさして、みなみは笑顔で肩をすくめる。

「ともあれ、お互い洗濯機さんがご機嫌損ねたんじゃなくて何よりですな。あ、洗濯もの入れたら座りなよ」

ぱんぱん、と、てのひらがみなみの隣の丸椅子をたたく。座面の紅色べにいろのビニール地がすこし破れて、クリーム色のスポンジがのぞいた——もしかしたら自分やみなみが生まれるよりも前から現役だったかもしれない、このコインランドリーの椅子。

乾燥機のドラムに袋の中身を押し入れ、十五分×二回分の百円玉二枚を入れてボタンを押して。薫はそうと、みなみの隣の丸椅子に腰をおろす。椅子の細い、黒のペンキ

もところどころ剥げた脚は揺らいで軋むので、思いきり座
つてしまふのはすこしおつかない。

並んで座したふたりの前、硝子戸越しに見えるのは、雨
の向こうに店灯りを浮かべた宵の口の商店街。

わが町の商店街には、二本の大通りがある。薫たちの春
日横丁のある日庵寺駅前にちあんじの通りと、それと並行して走る目
の前の通り。

道幅がやや広くて八百屋さんや魚屋さん・肉屋さんとい
った食料品店が多いので、夕方から宵の口にかけてにぎわ
うのは比較的こちら側で——とはいえ、雨のせいもあつて
今の人通りはいつもの七割くらい。

穏やかな賑わいの音に、乾燥機のリズムと、さああ……
と通りを打つ雨音が重なる。

「ほんと、雨はやんなつちやうつすよ。ジョギングも縄跳び
もできやしない」

頭の後ろで腕を組んで、みなみは唇をとがらせた。

「このところ、続くものね」

「そーそー！ 夏だったたら水着でも着て走りやいいけど、

さすがにこの時期は寒いしさ」

「うん。——？」

はずみでうなずいてしまつてから、二秒後に薫は一時停
止した。

そういえばみなみは去年の夏、「学校で夕立に降られて、
制服を鞆に詰めて学校の水着で春日横丁まで走つて帰つ
てくる」という暴挙を成した前科がある。桐香が、一週間
くらいめちやくちやに怒つて連日お説教していたのを憶え
ている薫だ。

一時停止はしたものの、たぶん踏み込んでも自分にはど
うにも対処できない気がして。頭の中でこの件は桐香に任
せ、このまま流すことにする。

「薫のそこは、雨だどう？ お客さん増えたり減つたり
する？」

「……どちらかというと、すこしいらつしやるひとは減る
かな」

みなみの問いに、すこし考えて——理髪店の娘たる薫は
答えた。

「やっぱり、整えた髪が濡れたりするのは避けたい、って思われるのかも。出かける前によそゆきにしていく、というひとも少なくなるだろうし」

「そっかあ、なるほど」

そういうもんかあ、と、みなみはコインランドリーの天井を仰ぐ。

「うちの店も、かさばるもの多いからやっぱり雨だとひとは来にくいかなあ」

みなみの家は、金物屋さんである。

料理器具なども扱っているが、木材や金具や大工道具、それに土や植木鉢といった園芸用品の面積が広いので……たしかに、晴れている日のほうが需要もあり、持ち帰りの便もいいのだろう。

「商店街の中くらいだったら、言ってくれりゃああたしが配達すんのにさ」

唇をとがらせて、みなみは苦笑した。

なんだろう。

学校用の水着姿で植木鉢とかを両手にさげて軽やかなス

テップで雨の商店街を歩くみなみの図が、頭には浮かんでしまう。薫はあわてて映像をシャットアウトした。

「でも、そっかあ。じゃあ今度から、あたしは髪切ってもらうの雨の日にするよ。ぼちぼち行きたいんだよね」

「ありがと——そういえば、だいぶ伸びたね」

「ん。年末ちよつと行きそびれちゃったからなあ」

言いながらみなみは、頭の片側で髪を束ねていたゴムを人さし指で抜きほどく。

トレーナーの胸のあたりにまで、ふあさりと落ちる髪。

実のところみなみは、春日横丁のメンバーの中で初穂と並んで髪が長い。どちらがいちばん長いかは、十河理髮店で髪を切るタイミングによって入れ替わる。

髪をほどいたまま、椅子に座ったみなみは心地よさそうにのびをした。

こうしてストレートヘアになると、いつもとすこし雰囲気が変わると、薫は思う。

呑気で元気な雰囲気はもちろん同じなのだけど、こう、なんだろう。

いたずらっぽさというか、しなやかな猫のような印象が加わるというか。

このモードのみなみを見たのは、昨年のクリスマスの前。自分の勘違いから、初穂と、春日横丁のみんなに迷惑をかけてしまったときのことだ。

あのときは自分も動揺のなかにあつて。そのうえみなみも髪をほどいていただけではなく、眼鏡にスカートなどという変装だったので、それこそすぐにはわからなかったけれど――

「ん？ でしたん？ 薫――」

耳に入った声に、薫は記憶から引き戻された。

目の前には、背を屈めてこちらを覗きあげるみなみ。

冬らしからぬ、そしてみなみらしい、大きく首回りがひらいたトレーナー。さらりとすべり落ちた黒髪の狭間に、すこやかな鎖骨のくぼみがのぞくのが見えた。

「やつ、べつに、どうも、」

椅子の脚先が床を擦る音を響かせて、薫は二〇センチ後ろに後ずさる。

万屋 みなみは、いとも簡単にひととの間合いを詰める。

自分ですらいま一瞬心音が跳ねあがってしまったので、その、桐香が毎日のように真っ赤になってどきまぎしているのはわかるというものであった。

蛍光灯の明かりの下、乾燥機の奏でるぐおん、ぐるんというリズムが数度、コインランドリーの中に響く。

「そうそう、髪っていえばさあ――」

こちらがあわあわしているのには気づいた様子もなく、みなみは切り出した。気分転換なのか、頭のさつきとはちがうサイドで髪をまとめながら。

「あのあとも、最近初穂の髪の毛洗ってんの？」

さらりと、爆薬が追加される。

あああ。

いやいやいや、その。爆薬ではない。

落ちつこう。別にごくごく普通の問いかけだ。

あのあとというのが去年の秋の夜のことか、それともお正月に皆で銭湯に行ったときのことかはわからないけれど、いずれにしても、

「ううん。あれからは、まだ」

つとめて平静な笑みを浮かべて、薫はちいさく肩をすくめた。

「なかなか、お店を使える日もないし、そんなに毎回初穂に頼むわけにもいかないし」

実際のところ、初穂とふたりになった登下校の途上で、お願いしようと思つて口を開きかけたことは幾度か——というかたぶん十何回かありはするのだけれど。さすがにそうそう繰り返しては、初穂だつてへんてこに思うだろうし。

「そうかなあ」

濃いめの眉を真面目なふうに人の字にして、みなみがこちらを見る。澄んだ瞳と唇が紡いだ声にこちらの胸の内が見通されている気がして、薫の背筋は伸びた。

「初穂、頼まれればいつでも喜んでだつて思いますぜ？ こないだ洗われてるときだつて、すっごいうれしそうだったし。」

松の湯さんで待ち合わせて洗いっことかすりやいいじゃ

ん。もつと」

今度こそまぎれもない爆弾が、十河薫の胸の中に投げ込まれた。

洗いっこ。

という単語が強すぎて、眉間の奥あたりで脳が揺れる。

「お——お風呂だと、そのつ、また、この間みたいに緊張してしまふからっ」

頭の中に浮かびかけた泡と肌の色の映像を、声のトーンをあげて薫は振り払う。

「まあ、まわりから見えちゃうもんね。そうかあ」

すこし考え込んでから、みなみはぴんと人さし指を立てる。

「じゃあさ。初穂のうちに行つてお風呂入らせてもらつて初穂の髪洗うのはどうだろう」

「そんなつ、むちゃくちゃだつて。そんな、ひとんちに入りに行くなんて」

「ええー？ そんな無茶かなあ。あたし、わりとよく桐香のとおこのお風呂入りにいつてるんだけど」

そそそれはみなみさんだからできることであつて。

思わず、頭の中だけで発した声なのに混乱でうわずつてしまう。

呑気そのものの声と表情で、みなみの言葉は続いた。

「あたしとちがつて、髪を洗う練習をするっていうちゃんとした理由があるんじゃない。あたしだったら、通わせてもらつて毎晩初穂に練習させてもらうけどなあ」

「——」
頭の奥と頬が火照りを帯びて、薫はばくばくと唇を動かした。

すこしいいかもしれない、などとごく一瞬思つてしまつた自分を懸命に引つ込める。

「いや、でも——初穂のうちのお風呂、ふたりで入つたらすこしきゆうくつかもしれないし。」

ふたりで入るだけじゃなくて、頭を洗うのだと場所もいるから」

「だつたらさあ。桃子のうちのお風呂場、ほら、あたしお正月に羽根つきのあとで桐香と入つたけど広かつたよー。」

桃子に頼んで毎日ふたりで入らせてもらうとか。そういうのはどう？」

みなみの繰り出す提案は、今度こそかなりむちやくちやであると言言できる。できるのだけれど、こう、反論の理屈はうまく言葉になつてくれない。

こちらが一手指すごとにむこうがチェスのルールで三手指せる詰将棋、みたいな按配あんばいになりつつあり。

いやその、みなみはそもそも一〇〇パーセントの善意で言つてくれているので、反論しなくてはいけないとかそういうものでもないし。

ええと。ええと、

ぴー———！！

耳に入った甲高い音を一瞬、十河 薫は、自分が蒸気か何かを噴ふきあげたのかと思つた。